



| | |
|------------------|---|
| Title | 挨拶 |
| Author(s) | 宮脇, 淳; 五十嵐, 智嘉子 |
| Citation | 年報 公共政策学, 6, 4-5 |
| Issue Date | 2012-03-30 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/51923 |
| Type | bulletin (other) |
| Note | シンポジウム: 共生型福祉事業と北のまちづくり: 誰もが、ともに生きられる北海道のために |
| File Information | APPS6_003.pdf |



[Instructions for use](#)

■ 挨拶

宮脇 淳 北海道公共政策大学院 院長

お集まりのみなさま、北海道大学公共政策大学院のシンポジウムにご出席いただきましたことを感謝申し上げます。また、この後の基調講演、パネルディスカッションに参加してくださいます先生方におかれましても、ご助力いただきましたことを深く御礼申し上げます。

私ども北大公共政策大学院は、今年で7年目を迎えることができました。この間、大学は厳しい環境の中で多くの受験者の方々にチャレンジしていただきました。また、このようなシンポジウムを含め、私どもが展開しているプログラムは、大学評価で全国10位に入る評価をいただきました。このような評価をいただけたのも、地域のみなさまのご助力があって実現したものだと思っております。

公共政策大学院は、設立当初から文系

と理系の融合を掲げてきました。東日本大震災の被災地などを見ますと、文系、理系のような人為的な区分が全く意味をなさないことを痛感します。こうした被災地の復旧・復興の原動力になるのは、地域のコミュニティであり、そこでどのような取り組みができるのかということになってくると思います。

今日、このような形でシンポジウムを開催できるのは、大きな成果だと思っております。

長丁場になりますが、みなさま一人ひとりにとって、実りの多い時間になることを期待いたします。最後に、私どもとともに主催いただきました、社団法人北海道総合研究調査会様にこの場をお借りして御礼申し上げます。

五十嵐 智嘉子 (社)北海道総合研究調査会 専務理事

本日は、お集まりいただきありがとうございます。私の方からは、今日のテーマである、共生型地域福祉事業がなぜ北海道で多く展開されているのかという背景をお話させていただきます。

「共生型事業」という名称を聞くと、福祉関係者が最初に思い浮かべるのは、富山方式と呼ばれる「このゆびと一まれ」の活動だと思います。その他、熊本県の「地域の縁側づくり事業」や宮城県

の「共生型グループホーム」、高知県の「あったかふれあいセンター」といった取り組みがあります。

富山県の「このゆびと一まれ」の取り組みを聞いたときは、「目からウロコ」でした。施設としてはデイサービスですが、認知症高齢者も障害者、子どももゆっくりと思いのままに過ごしています。

また、別の例で共生グループホームがあります。障害者が朝、仕事に出かける

ときに、認知症高齢者が「いってらっしゃい」と送り出します。夕方、障害者が帰ってくると、認知症高齢者が「おかえり」と言って迎えて、みんなで一緒にごはんを作って食べます。日中は、子ども連れのお母さん達が集まって、高齢者と一緒に遊んだり、日常生活そのものの場になっています。

北海道でもそのような取り組みはあったと思いますが、きちんと仕組みとして存在していなかった。それが形になった背景には、平成19年、北海道として共生型施設整備を強力に推進したことがあります。その事業は、厚生労働省が福祉施設のハード整備のために実施した「地域介護福祉空間推進交付金事業」です。当時、療養病床を再編するために、介護療養病床を廃止しようとする動きがありました。それはまだ実現していませんが、そのときにケアが必要な高齢者を地域で受け入れるための面的整備を進めるために準備された資金です。

この中の1つに「高齢者と障害者、あるいは子どもと一緒に暮らせるサービス事業」という項目があり、これを使って

共生型事業推進プロジェクトを立ち上げていこうという動きが道庁の中で起こりました。この事業では、1施設に3,000万円の交付金が支給され、さらに1年間に3回公募があったため、一気に広がりました。

この事業は、平成23年6月現在、交付決定段階のものも含め、全道で106件になっています。

今日は、「福祉」という枠組みを越え、地域づくりや地域の産業づくりなどにも関わりを持っている事例を紹介します。なかには、どのように地域と一緒にやっていくのか苦労している事例もありますが、みなさんと一緒に勉強することで、さまざまな展開の仕方があることを学習していきたいと思っています。共生型事業とはこういうものだというのはまだ確立されていませんが、地域の実情に合わせたユニークな取り組みが行われているので、北海道の共生型事業のコンセプトはこういうものだという議論をみなさんと一緒にしていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。